



初孫の友菜ちゃんと一緒に

🎬 エピソード1 味方

習志野市 武田恵子さん
(主婦・銀行勤務)

「よもや孫のできる歳になってもハマリ続けているとは、予想外でした」

武田さんがバドミントンを始めたのは17年前。初心者で近所のクラブに入部した当初は幽霊部員でしたが、少しずつ上達し試合にも出場するようになると、いつしかバドミントンは人生に欠くことのできない大事な趣味に。

ところが数年たった頃、予想外なことが。痩せ型だった武田さんが急に太りだし、それが引き金となったのか、膝が悲鳴をあげ始めたのです。「痛くてもバドミントンはやりたくて、サポーター等で済ませましたし、長いこと練習を続けてしまいました」それも限界となり、地元の整形外科に行くことにはしたものの、「ママさんスポーツって、ただでさえ単なる暇つぶしのように思われがち。それで膝を傷めたとなれば、病院でもきつと、『もう歳なんだから、無理なスポーツはやめときなさい』と言われてしまうんだろうなと気が重かったんです」と武田さん。

診断してもらった結果は「変形性膝関節症」。中高年に非常に多い膝の疾患であり、武田さんの膝の場合は軽症とは言えませんでした。とりあえずバドミントンを休止し、治療とリハビリの

ためにしばらく通院することに。そしておそろのおそろ「バドミントンはやめないとダメですか?」と聞いてみると、主治医が言いました。

「僕があなたの膝の味方だけするなら、『やめるに越したことはない』と答えるかもしれません。でも僕は、膝の味方である前にあなたの味方。あなたが人生の大切な楽しみを失くさないで済むようサポートしていきますよ」

答えは良いか悪いか二つに一つ。そう思っていた武田さんにとって、それはなんとも予想外の答えでした。「でも、たかがおばちゃんスポーツと片付けてしまわず、私の気持ちを理解してもらえたことがとても嬉しくて、この言葉がずっと心に残ってるんです」

以来、治療とリハビリに励み、数カ月後にはバドミントンを再開。「その病院の主治医とリハビリの先生のお陰で、今も大好きなバドミントンを続けることができています。ケガが多い私にとって、整形外科のかかりつけ医は必要不可欠。いざという時、安心して頼れる有り難い味方です」『そうして武田さんのバドミントンライフは、予想外なほど未永く続きました…』というハッピーエンドとなることを、心より願って。

患者さんとお医者さんの ひとこまストーリー募集!

「こんな一言で勇気が出た」「不安な気持ちが安らいだ」など、体験エピソードなどをお寄せください。本誌に掲載させていただきました方には、図書カードをプレゼントいたします。また「文章は苦手」という方は、編集部が取材にまいりますので、下記までご連絡ください。

◆投稿先: 〒260-0026 千葉市中央区千葉港7-1 社団法人 千葉県医師会 広報課「ミレニアム」係/Eメール kouhou@office-cma.or.jp

◆文字数: 1,100文字以内(投稿用紙の様式は問いません) ◆プレゼント: 本誌掲載された方 図書カード